



白



芥川 龍之介

藍岩堂



白



藍岩堂



ある春の午過ぎです。白と云う犬は土を嗅ぎ嗅ぎ、静かな往来を歩いていました。狭い往来の両側にはずっと芽をふいた生垣が続き、そのまた生垣の間にはちらほら桜なども咲いています。白は生垣に沿いながら、ふとある横町へ曲りました。が、そちらへ曲ったと思うと、さもびっくりしたように、突然立ち止ってしまいました。

それも無理はありません。その横町の七八間先には印半纏を着た犬殺しが一人、罨を後に隠したまま、一匹の黒犬を狙っているのです。しかも黒犬は何も知らずに、犬殺しの投げてくれたパンか何かを食べているのです。けれども白が驚いたのはそのせいばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しに狙われているのはお隣の飼犬の黒なのです。毎朝顔を合せる度にお互の鼻の匂いを嗅ぎ合う、大の仲よしの黒なのです。

白は思わず大声に「黒君！ あぶない！」と叫ぼうとしました。が、その拍子に犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教えて見ろ！ 貴様から先へ罨にかけるぞ。」——犬殺しの目にはありありとそう云う嚇しが浮んでいます。白は余りの恐ろしさに、思わず吠えるのを忘れませんでした。いや、忘れたばかりではありません。一刻もじっとしてはいられぬほど、臆病風が立ち出したのです。白は犬殺しに目を配りながら、じりじり後ずぎりを始めました。そうしてまた生垣の蔭に犬殺しの姿が隠れるが早いのか、可哀そうな黒を残したまま、一目散に逃げ出しました。

その途端に罨が飛んだのでしょう。続けさまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、往来どめの縄を擦り抜け、五味ための箱を引っくり返し、振り向きもせずに逃げ続けました。御覧なさい。坂を駈けおりののを！ そら、自動車に轢かれそうになりました！ 白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れません。いや、白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声が虻のように唸っているのです。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

白はやっと喘あえぎ喘あえぎ、主人の家へ帰って来ました。黒くろ堀べいの下の犬くぐりを抜け、物置小屋を廻りさえすれば、犬小屋のある裏庭です。白はほとんど風のように、裏庭の芝しばふ生かへ駈かけこみました。もうここまで逃げて来れば、罌わなにかかる心配はありません。おまけに青あおした芝生には、幸いお嬢さんや坊ちゃんもボオル投げをして遊んでいます。それを見た白の嬉しさは何と云えば好いのでしょうか？ 白は尻尾しっぽを振りながら、一足いっそくと飛びにそこへ飛んで行きました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ 今日は犬殺しにあ遇いいましたよ。」

白は二人を見上げると、息もつかずにこう云いました。（もっともお嬢さんや坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞えるだけなのです。）しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんもただ呆あっけ気にとられたように、頭さえ撫なでてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！ あなたは犬殺しを御存じですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりましたが、お隣の黒君は掴つかまりましたぜ。」

それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見合せているばかりです。おまけに二人はしばらくすると、こんな妙なことさえ言い出すのです。

「どこの犬でしょう？ 春夫はるおさん。」

「どこの犬だろう？ 姉さん。」

どこの犬？ 今度は白の方が呆あっけ気にとられました。（白にはお嬢さんや坊ちゃんの言葉もちゃんと聞きわけることが出来るのです。我々は犬の言葉がわからないものですから、犬もやはり我々の言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。犬が芸を覚えるのは我々の言葉がわかるからです。しかし我々は犬の言葉を聞きわけることが出来ませんから、聞やみの中を見通すことだの、かすかな匂においを嗅かぎ当てることだの、犬の教えてくれる芸は一つも覚えることが出来ません。）

「どこの犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

けれどもお嬢さんは不あいかわず相あ変あ気味悪そうに白を眺めています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちゃにしながら、考え深そうに答えました。

「こいつも体中からだじゅう まっ黒だから。」

白は急に背中の毛が逆立さかだつように感じました。まっ黒！ そんなはずはありません。白はまだ子犬の時から、牛乳ぎゅうにゅうのように白かったのですから。しかし今前足を見ると、いや、——前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足あとあしも、すらりと上品に延のびた尻尾しっぽも、みんな鍋底なべそこのようにまっ黒なのです。まっ黒！ まっ黒！ 白は気でも違ったように、飛び上ったり、跳はね廻まわったりしながら、一生懸命ほに吠ほえ立てました。

「あら、どうしましょう？ 春夫さん。この犬はきっと狂犬きょうけん だよ。」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそうな声を出しました。しかし坊ちゃんは勇敢ゆうかんです。白はたちまち左の肩をばかりとバットに打たれました。と思うと二度目のバットも頭

の上へ飛んで来ます。白はその下をくぐるが早いか、<sup>もと</sup>元<sup>とき</sup>来た方へ逃げ出しました。けれども今度はさっきのように、一町も二町も逃げ出しはしません。<sup>しばふ</sup>芝生のはずれには<sup>しゅろ</sup>棕櫚の木のかげに、クリーム色に<sup>ぬ</sup>塗った犬小屋があります。白は犬小屋の前へ来ると、小さい主人たちを振り返りました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ。いくらまっ黒になっても、やっぱりあの白なのですよ。」

白の声は何とも云われぬ悲しさと怒りとに<sup>ふる</sup>震えていました。けれどもお嬢さんや坊ちゃんにはそう云う白の心もちも呑みこめるはずはありません。現にお嬢さんは<sup>にく</sup>憎らしそうに、

「まだあすこに<sup>ほ</sup>吠えているわ。ほんとうに<sup>ずうずう</sup>凶々しい<sup>のらいぬ</sup>野良犬ね。」などと、地だんだを踏んでいるのです。坊ちゃんも、——坊ちゃんは<sup>こみち</sup>小径の<sup>じゃり</sup>砂利を拾うと、力一ぱい白へ投げつけました。

「<sup>ちくしょう</sup>畜生！ まだ<sup>ぐずぐず</sup>愚図愚図しているな。これでもか？ これでもか？」砂利は続けさまに飛んで来ました。中には白の耳のつけ根へ、<sup>にじ</sup>血の<sup>し</sup>滲むくらい当たったものもあります。白はとうとう<sup>しっぽ</sup>尻尾を巻き、黒塀の外へぬけ出しました。黒塀の外には春の日の光に銀の<sup>こな</sup>粉を<sup>もんしろちょう</sup>浴びた<sup>もんしろちょう</sup>紋白蝶が一羽、気楽そうにひらひら飛んでいます。

「ああ、きょうから宿無し犬になるのか？」

白はため息を<sup>も</sup>洩らしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空を眺めていました。

お嬢さんや坊ちゃんに<sup>お</sup>逐い出された白は東京中をうろうろ歩きました。しかしどこへどうしても、忘れることの出来ないのはまっ黒になった姿の事です。白は客の顔を<sup>うつ</sup>映している理髪店の鏡を恐れました。<sup>あまあが</sup>雨上りの空を映している<sup>おうらい</sup>往来の水たまりを恐れました。往来の若葉を映している<sup>かざりまど</sup>飾窓の硝子を恐れました。いや、カフェのテーブルに黒ビイルを<sup>たた</sup>湛えているコップさえ、——けれどもそれが何になりましょう？ あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。<sup>うるし</sup>漆を光らせた自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。——はっきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待の自動車の<sup>わけ</sup>ように、到るところにある訣なのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しそうに<sup>うな</sup>唸ったと思うと、たちまち公園の中へ<sup>か</sup>駈けこみました。

公園の中には<sup>すずかけ</sup>鈴懸の若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を<sup>た</sup>垂れたなり、木々の間を歩いて行きました。ここには幸い池のほかには、姿を映すものも見当りません。物音はただ<sup>しろばら</sup>白薔薇に<sup>むら</sup>群がる<sup>はち</sup>蜂の音が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、しばらくは<sup>みにく</sup>醜い黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかしそう云う幸福さえ五分と続いたかどうかわかりません。白はただ夢のように、ベンチの<sup>なら</sup>並んでいる<sup>みち</sup>路ばたへ出ました。するとその路の曲り角の向うにけたたましい犬の声があったのです。

「きゃん。きゃん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

白は思わず<sup>みぶる</sup>身震いをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、元来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の<sup>あいだ</sup>間<sup>すさま</sup>の<sup>うな</sup>こと<sup>も</sup>です。白は<sup>うな</sup>凄じい唸り声を洩らすと、きりりとまた振り返りました。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

この声はまた白の耳にはこう云う言葉にも聞えるのです。

「きゃあん。きゃあん。<sup>おくびょう</sup>臆病ものになるな！ きゃあん。臆病ものになるな！」

白は頭を低めるが早いか、声のする方へ<sup>か</sup>駈け出しました。

けれどもそこへ来て見ると、白の目の前へ現れたのは犬殺しなどではありません。ただ学校の帰りらしい、洋服を着た子供が二三人、<sup>くび</sup>頸のまわりへ<sup>なわ</sup>縄をつけた茶色の子犬を引きずりながら、何かわいわい<sup>さわ</sup>騒いでいるのです。子犬は一生懸命に引きずられまいともがきもがき、「助けてくれえ。」と繰り返していました。しかし子供たちはそんな声に耳を借すけしきもありません。ただ笑ったり、<sup>どな</sup>怒鳴ったり、あるいはまた子犬の腹を<sup>くつ</sup>靴で<sup>け</sup>蹴ったりするばかりです。

白は少しもためらわずに、子供たちを目がけて吠えかかりました。不意を打たれた子供たちは驚いたの驚かないのではありません。また実際白の<sup>ようす</sup>容子は火のように燃えた眼の色と云い、<sup>はもの</sup>刃物の<sup>きば</sup>ようにむき出した<sup>か</sup>牙の列と云い、今にも<sup>しほう</sup>噛みつくかと思うくらい、恐ろしいけんまくを見せているのです。子供たちは<sup>しほう</sup>四方へ逃げ散りました。中には余り<sup>ろうばい</sup>狼狽したはずみに、<sup>みち</sup>路ばたの花壇へ<sup>しか</sup>飛びこんだのもあります。白は二三間追いかけた<sup>のち</sup>後、くるりと子犬を振り返ると、<sup>しか</sup>叱るよう

う声をかけました。

「さあ、おれと一しょに來い。お前の<sup>うち</sup>家まで送ってやるから。」

白は<sup>もと</sup>元來た木々の<sup>あいだ</sup>間へ、まっしぐらにまた<sup>か</sup>駈けこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、<sup>ばら</sup>薔薇を<sup>けち</sup>蹴散らし、白に負けまいと走って來ます。まだ頸にぶら下った、長い縄をひきずりながら。

×

×

×

二三時間たった<sup>のち</sup>後、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と<sup>たたず</sup>佇んでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がとまり、音のかすれた<sup>ちくおんき</sup>蓄音機は<sup>なにわぶし</sup>浪花節か何かやっているようです。子犬は<sup>とくい</sup>得意そうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕はここに住んでいるのです。この<sup>たいしょうけん</sup>大正軒と云うカフェの中に。——おじさんはどこに住んでいるのです？」

「おじさんかい？——おじさんはずっと遠い町にいる。」

白は寂しそうにため息をしました。

「じゃもうおじさんは<sup>うち</sup>家へ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？ なぜまたそんなことを<sup>たず</sup>尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここに<sup>とま</sup>泊って行って下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を云わせて下さい。僕の家には牛乳だの、カレエ・ライスだの、ピフテキだの、いろいろな<sup>ごちそう</sup>御馳走があるのです。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんによろしく。」

白はちょっと空を見てから、静かに敷石の上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはず<sup>みかづき</sup>れに、三日月もそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと云えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと云うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも云われますけれども。——おじさんの名前は何と云うのです？」

「おじさんの名前は白と云うのだよ。」

「白——ですか？ 白と云うのは不思議ですね。おじさんはどこも黒いじゃありませんか？」

白は胸が一ぱいになりました。

「それでも白と云うのだよ。」

「じゃ白のおじさんと云いましょう。白のおじさん。ぜひまた近い<sup>うち</sup>内に一度来て下さい。」

「じゃナポ公、さよなら！」

「<sup>ごきげんよ</sup>御機嫌好う、白のおじさん！ さようなら、さようなら！」

その<sup>のち</sup>後の白はどうなったか？——それは一々話さずとも、いろいろの新聞に伝えられています。  
 。大<sup>おお</sup>かたどなたも御存じでしょう。度<sup>たびたび</sup>々危<sup>あやう</sup>い人命を救った、勇ましい一匹の黒犬のあるのを。  
 。また一時『義<sup>ぎげん</sup>犬』と云う活動写真の流行したことを。あの黒犬こそ白だったのです。しかしまだ不幸にも御存じのない方<sup>かた</sup>があれば、どうか下<sup>しも</sup>に引用した新聞の記事を読んで下さい。

東京日日新聞。昨十八日（五月）午前八時四十分、奥<sup>しじゅうぶん</sup>羽<sup>おう</sup>線<sup>せん</sup>上<sup>のぼ</sup>り急行列車<sup>たばたえき</sup>が田<sup>ふみきり</sup>端<sup>ふみきり</sup>駅<sup>ふみきり</sup>附近<sup>ふみきり</sup>の踏<sup>ふみきり</sup>切<sup>ふみきり</sup>を通過<sup>ふみきり</sup>する際<sup>ふみきり</sup>、踏<sup>ふみきり</sup>切<sup>ふみきり</sup>番<sup>ふみきり</sup>人<sup>ふみきり</sup>の過<sup>ふみきり</sup>失<sup>ふみきり</sup>に依<sup>よ</sup>り、田<sup>よ</sup>端<sup>よ</sup>一<sup>よ</sup>二<sup>よ</sup>三<sup>よ</sup>会<sup>よ</sup>社<sup>よ</sup>員<sup>よ</sup>柴<sup>しば</sup>山<sup>やま</sup>鉄<sup>てつ</sup>太<sup>た</sup>郎<sup>らう</sup>の長<sup>さ</sup>男<sup>ねこ</sup>実<sup>し</sup>彦<sup>げい</sup>（四<sup>し</sup>歳<sup>さい</sup>）が列<sup>れ</sup>車<sup>き</sup>の通<sup>と</sup>る線<sup>せん</sup>路<sup>ろ</sup>内<sup>ない</sup>に立<sup>た</sup>ち入<sup>い</sup>り、危<sup>れ</sup>く轢<sup>し</sup>死<sup>し</sup>を遂<sup>と</sup>げようとした。その時<sup>た</sup>遅<sup>ち</sup>しい黒<sup>くろ</sup>犬<sup>いぬ</sup>が一<sup>い</sup>匹<sup>びつ</sup>、稻<sup>いな</sup>妻<sup>づま</sup>のよ  
 うに踏<sup>せま</sup>切<sup>せま</sup>へ飛<sup>と</sup>びこみ、目<sup>め</sup>前<sup>まへ</sup>に迫<sup>せま</sup>った列<sup>れ</sup>車<sup>き</sup>の車<sup>くるま</sup>輪<sup>りん</sup>から、見<sup>み</sup>事<sup>ごと</sup>に実<sup>た</sup>彦<sup>くま</sup>を救<sup>すく</sup>い出<sup>だ</sup>した。この勇<sup>い</sup>敢<sup>な</sup>なる黒<sup>くろ</sup>犬<sup>いぬ</sup>は人<sup>た</sup>々<sup>ち</sup>の立<sup>あ</sup>いだ騒<sup>さわ</sup>いでいる間<sup>ま</sup>にどこかへ姿<sup>ひようしやう</sup>を隠<sup>かく</sup>したため、表<sup>ひようしやう</sup>彰<sup>しょう</sup>したいにもすることが出来<sup>で</sup>ず、当<sup>た</sup>局<sup>きょく</sup>は大<sup>おほ</sup>いに困<sup>ま</sup>っている。

東京朝日新聞。軽<sup>かるいざわ</sup>井<sup>いざわ</sup>沢<sup>ざわ</sup>に避暑<sup>かろいざわ</sup>中のアメリ<sup>あめり</sup>カ富<sup>ふ</sup>豪<sup>ごう</sup>エドワ<sup>えどわ</sup>ア<sup>あ</sup>ド<sup>ど</sup>・バ<sup>ば</sup>ア<sup>あ</sup>ク<sup>く</sup>レ<sup>れ</sup>エ<sup>え</sup>氏<sup>し</sup>の夫<sup>おとこ</sup>人<sup>にん</sup>はペ<sup>ぺ</sup>ル<sup>る</sup>シ<sup>し</sup>ア<sup>あ</sup>産<sup>さん</sup>の猫<sup>ねこ</sup>を寵<sup>ちやう</sup>愛<sup>あい</sup>している。すると最近<sup>さい</sup>同<sup>どう</sup>氏<sup>し</sup>の別<sup>べつ</sup>荘<sup>しやう</sup>へ七<sup>しち</sup>尺<sup>じやく</sup>余<sup>い</sup>りの大<sup>だい</sup>蛇<sup>じゃ</sup>が現<sup>あら</sup>れ、ヴェ<sup>べ</sup>ラ<sup>ら</sup>ン<sup>ん</sup>ダ<sup>だ</sup>に在<sup>あ</sup>る猫<sup>ねこ</sup>を吞<sup>の</sup>もうとした。そこへ見<sup>み</sup>慣<sup>な</sup>れぬ黒<sup>くろ</sup>犬<sup>いぬ</sup>が一<sup>い</sup>匹<sup>びつ</sup>、突<sup>つ</sup>然<sup>ぜん</sup>猫<sup>ねこ</sup>を救<sup>すく</sup>いに駈<sup>か</sup>けつ<sup>つ</sup>け、二十<sup>にじゅう</sup>分<sup>ぶん</sup>に巨<sup>こ</sup>る奮<sup>ふん</sup>闘<sup>とう</sup>の後<sup>のち</sup>、  
 とうとうその大<sup>か</sup>蛇<sup>か</sup>を噛<sup>か</sup>み殺<sup>ころ</sup>した。しかしこのけなげな犬<sup>いぬ</sup>はどこかへ姿<sup>な</sup>を隠<sup>かく</sup>したため、夫<sup>おとこ</sup>人<sup>にん</sup>は五<sup>ご</sup>千<sup>せん</sup>弗<sup>ふ</sup>の賞<sup>しょう</sup>金<sup>きん</sup>を懸<sup>か</sup>け、犬<sup>いぬ</sup>の行<sup>ゆく</sup>方<sup>え</sup>を求<sup>もと</sup>めている。

国民新聞。日本<sup>にっぽん</sup>アル<sup>あ</sup>プ<sup>ぷ</sup>ス横<sup>よこ</sup>断<sup>だん</sup>中<sup>ちゆう</sup>、一<sup>いっ</sup>時<sup>じ</sup>行<sup>ゆく</sup>方<sup>え</sup>不<sup>ふ</sup>明<sup>めい</sup>にな<sup>な</sup>った第<sup>だい</sup>一<sup>いち</sup>高<sup>こう</sup>等<sup>とう</sup>学<sup>がく</sup>校<sup>こう</sup>の生<sup>せい</sup>徒<sup>と</sup>三<sup>さん</sup>名<sup>めい</sup>は七<sup>なな</sup>日<sup>にち</sup>（八<sup>はち</sup>月<sup>げつ</sup>）上<sup>かみ</sup>高<sup>こう</sup>地<sup>ち</sup>の温<sup>おん</sup>泉<sup>せん</sup>へ着<sup>ちやく</sup>した。一<sup>いっ</sup>行<sup>ぎやう</sup>は穂<sup>ほ</sup>高<sup>こう</sup>山<sup>さん</sup>と槍<sup>やり</sup>ヶ<sup>が</sup>岳<sup>たけ</sup>との間<sup>あ</sup>に途<sup>みち</sup>を失<sup>あ</sup>い、かつ過<sup>あ</sup>日<sup>にち</sup>の暴<sup>ぼう</sup>風<sup>ふう</sup>雨<sup>う</sup>にテ<sup>てん</sup>ト<sup>と</sup>天<sup>てん</sup>幕<sup>まく</sup>糧<sup>りやう</sup>食<sup>じき</sup>等<sup>とう</sup>を奪<sup>うば</sup>われたため、ほとん<sup>ほとん</sup>ど死<sup>し</sup>を覚<sup>さく</sup>悟<sup>ご</sup>していた。然<sup>しか</sup>るにどこからか黒<sup>くろ</sup>犬<sup>いぬ</sup>が一<sup>い</sup>匹<sup>びつ</sup>、一<sup>いっ</sup>行<sup>ぎやう</sup>のさまよっていた溪<sup>けい</sup>谷<sup>こく</sup>に現<sup>あら</sup>れ、あ<sup>あ</sup>たかも案<sup>あん</sup>内<sup>ない</sup>をするよ<sup>よ</sup>うに、先<sup>ま</sup>へ立<sup>た</sup>って歩<sup>あ</sup>き出<sup>だ</sup>した。一<sup>いっ</sup>行<sup>ぎやう</sup>はこの犬<sup>いぬ</sup>の<sup>あ</sup>後<sup>のち</sup>に従<sup>したが</sup>い、一<sup>いっ</sup>日<sup>にち</sup>余<sup>い</sup>り歩<sup>あ</sup>いた後<sup>のち</sup>、や<sup>や</sup>つと上<sup>かみ</sup>高<sup>こう</sup>地<sup>ち</sup>へ着<sup>ちやく</sup>することが出来<sup>で</sup>た。しかし犬<sup>いぬ</sup>は目<sup>め</sup>の<sup>あ</sup>下<sup>した</sup>に温<sup>おん</sup>泉<sup>せん</sup>宿<sup>しゆく</sup>の屋<sup>や</sup>根<sup>こん</sup>が見<sup>み</sup>えると、一<sup>いっ</sup>声<sup>こゑ</sup>嬉<sup>ほ</sup>しそ<sup>そ</sup>うに吠<sup>ほ</sup>えたき<sup>き</sup>り、も<sup>も</sup>う一<sup>いっ</sup>度<sup>ど</sup>もと来<sup>く</sup>た熊<sup>くま</sup>笹<sup>ささ</sup>の中<sup>なか</sup>へ姿<sup>し</sup>を隠<sup>かく</sup>してしま<sup>しま</sup>ったと云<sup>い</sup>う。一<sup>いっ</sup>行<sup>ぎやう</sup>は皆<sup>みな</sup>この犬<sup>いぬ</sup>が来<sup>き</sup>たのは神<sup>しん</sup>明<sup>めい</sup>の加<sup>か</sup>護<sup>ご</sup>だと信<sup>しん</sup>じている。

時事新報。十三<sup>じゅう</sup>日<sup>にち</sup>（九<sup>く</sup>月<sup>げつ</sup>）名<sup>な</sup>古<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup>市<sup>し</sup>の大<sup>だい</sup>火<sup>か</sup>は焼<sup>や</sup>死<sup>し</sup>者<sup>しやく</sup>十<sup>じゅう</sup>余<sup>い</sup>名<sup>めい</sup>に及<sup>およ</sup>んだが、横<sup>よこ</sup>関<sup>かん</sup>名<sup>な</sup>古<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup>市<sup>し</sup>長<sup>ちやう</sup>など<sup>など</sup>も愛<sup>あい</sup>児<sup>に</sup>を失<sup>あ</sup>おうとした一<sup>いっ</sup>人<sup>にん</sup>である。令<sup>れい</sup>息<sup>しき</sup>武<sup>ぶ</sup>矩<sup>こ</sup>（三<sup>さん</sup>歳<sup>さい</sup>）はいかな<sup>いかな</sup>る家<sup>か</sup>族<sup>ぞく</sup>の手<sup>て</sup>落<sup>らく</sup>からか、猛<sup>まう</sup>火<sup>か</sup>の中<sup>なか</sup>の二<sup>に</sup>階<sup>かい</sup>に残<sup>のこ</sup>され、す<sup>す</sup>でに灰<sup>かい</sup>燼<sup>じん</sup>とな<sup>な</sup>ろうとしたところを、一<sup>いっ</sup>匹<sup>びつ</sup>の黒<sup>くろ</sup>犬<sup>いぬ</sup>のため<sup>ため</sup>に啣<sup>くわ</sup>え出<sup>だ</sup>された。市<sup>し</sup>長<sup>ちやう</sup>は今<sup>いま</sup>後<sup>ご</sup>名<sup>な</sup>古<sup>こ</sup>屋<sup>や</sup>市<sup>し</sup>に限<sup>かぎ</sup>り、野<sup>や</sup>犬<sup>いぬ</sup>撲<sup>ぶく</sup>殺<sup>さつ</sup>を禁<sup>かぎ</sup>ずると云<sup>い</sup>っている。

読<sup>よ</sup>売<sup>う</sup>新<sup>しん</sup>聞<sup>ぶん</sup>。小<sup>お</sup>田<sup>だ</sup>原<sup>わら</sup>町<sup>まち</sup>城<sup>じやう</sup>内<sup>ない</sup>公<sup>こう</sup>園<sup>えん</sup>に連<sup>れん</sup>日<sup>にち</sup>の人<sup>にん</sup>気<sup>き</sup>を集<sup>あ</sup>めていた宮<sup>みや</sup>城<sup>じやう</sup>巡<sup>じゆん</sup>回<sup>かい</sup>動<sup>どう</sup>物<sup>ぶつ</sup>園<sup>えん</sup>のシ<sup>し</sup>ベ<sup>べ</sup>リ<sup>り</sup>ヤ<sup>や</sup>産<sup>さん</sup>大<sup>お</sup>狼<sup>おおかみ</sup>は二十五<sup>にじゅうご</sup>日<sup>にち</sup>（十<sup>じゅう</sup>月<sup>げつ</sup>）午<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>二<sup>に</sup>時<sup>じ</sup>ご<sup>ご</sup>ろ、突<sup>つ</sup>然<sup>ぜん</sup>巖<sup>い</sup>乗<sup>じやう</sup>な檻<sup>お</sup>を破<sup>やぶ</sup>り、木<sup>き</sup>戸<sup>ど</sup>番<sup>ばん</sup>二<sup>に</sup>名<sup>めい</sup>を負<sup>お</sup>傷<sup>やぶ</sup>させ<sup>せ</sup>た後<sup>のち</sup>、箱<sup>はこ</sup>根<sup>こん</sup>方<sup>かた</sup>面<sup>めん</sup>へ逸<sup>いっ</sup>走<sup>そう</sup>した。小<sup>お</sup>田<sup>だ</sup>原<sup>わら</sup>署<sup>しよ</sup>はそのた<sup>た</sup>めに非<sup>ひ</sup>常<sup>じやう</sup>動<sup>どう</sup>員<sup>いん</sup>を行<sup>い</sup>い、全<sup>ぜん</sup>町<sup>ちやう</sup>に巨<sup>こ</sup>る警<sup>けい</sup>戒<sup>かい</sup>線<sup>せん</sup>を布<sup>ふ</sup>いた。すると午<sup>ご</sup>後<sup>ご</sup>四<sup>し</sup>時<sup>じ</sup>半<sup>はん</sup>ご<sup>ご</sup>ろ右<sup>みぎ</sup>の狼<sup>おおかみ</sup>は十<sup>じゅう</sup>字<sup>じ</sup>町<sup>ちやう</sup>に現<sup>あら</sup>れ、一<sup>いっ</sup>匹<sup>びつ</sup>の黒<sup>くろ</sup>犬<sup>いぬ</sup>と噛<sup>か</sup>み合<sup>あ</sup>いを初<sup>は</sup>めた。黒<sup>くろ</sup>犬<sup>いぬ</sup>は悪<sup>あく</sup>戦<sup>せん</sup>頗<sup>すこぶ</sup>る努<sup>ゆめ</sup>め、ついに敵<sup>か</sup>を噛<sup>か</sup>み伏<sup>ふ</sup>せるに至<sup>いた</sup>った。そこへ警<sup>けい</sup>戒<sup>かい</sup>中<sup>ちゆう</sup>の巡<sup>じゆん</sup>査<sup>さ</sup>も駈<sup>か</sup>けつ<sup>つ</sup>け、直<sup>ちやく</sup>ちに狼<sup>おおかみ</sup>を銃<sup>じゆう</sup>殺<sup>さつ</sup>した。この狼<sup>おおかみ</sup>はル<sup>る</sup>プ<sup>ぷ</sup>ス・ジ<sup>じ</sup>ガ<sup>が</sup>ン<sup>ん</sup>テ<sup>て</sup>ィ<sup>い</sup>ク<sup>く</sup>スと称<sup>しょう</sup>し、最<sup>さい</sup>も兇<sup>きやう</sup>猛<sup>もう</sup>な種<sup>しゆ</sup>属<sup>じやく</sup>である<sup>である</sup>と云<sup>い</sup>う。な<sup>な</sup>お宮<sup>みや</sup>城<sup>じやう</sup>動<sup>どう</sup>物<sup>ぶつ</sup>園<sup>えん</sup>主<sup>しゆ</sup>は狼<sup>おおかみ</sup>の銃<sup>じゆう</sup>殺<sup>さつ</sup>を不<sup>ふ</sup>当<sup>たう</sup>とし、小<sup>お</sup>田<sup>だ</sup>原<sup>わら</sup>署<sup>しよ</sup>長<sup>ちやう</sup>を相<sup>あ</sup>手<sup>て</sup>ど<sup>ど</sup>つた告<sup>こく</sup>訴<sup>そ</sup>を起<sup>おこ</sup>すと<sup>と</sup>い<sup>い</sup>き<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>て<sup>い</sup>る。等<sup>とう</sup>、等<sup>とう</sup>、等<sup>とう</sup>。

ある秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。勿論<sup>もちろん</sup> お嬢さんや坊ちゃんはとうに<sup>とこ</sup>床へはっています。いや、今は誰一人起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の<sup>しばふ</sup>芝生の上にも、ただ高い<sup>しゅろ</sup>棕櫚の木の<sup>こずえ</sup>梢に白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、<sup>つゆぬ</sup>露に濡れた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういう<sup>ひとりごと</sup>独語を始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と戦って来ました。それは一つには何かの<sup>ひょうし</sup>拍子に<sup>すす</sup>煤よりも黒い体を見ると、臆病を<sup>は</sup>恥じる気が起ったからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼と戦ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪われません。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げ去ってしまうのです。わたしはどうとう苦しさの余り、自殺しよう<sup>ひとめ</sup>と決心しました。ただ自殺をするにつけても、ただ一日<sup>ひとめ</sup>会いたいのは可愛がって下すった御主人です。勿論お嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きっとまた<sup>のらいぬ</sup>野良犬と思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバットに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望です。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見るほかに、何も願うことはありません。そのため今夜ははるばるともう一度ここへ帰って来ました。どうか夜の明け次第、お嬢さんや坊ちゃんに会わせて下さい。」

白は<sup>ひとりごと</sup>独語を云い終ると、<sup>しばふ</sup>芝生に<sup>あご</sup>髑をさしのべたなり、いつかぐっすり寝入ってしまいました。

×

×

×

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだろう？ 姉さん。」

白は小さい主人の声に、はっきりと目を<sup>ひら</sup>開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に<sup>たたず</sup>佇んだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝生の上へ伏せてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまっ黒に変わった時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——白は今では帰って来たことを<sup>こうかい</sup>後悔する気さえ起りました。するとその<sup>とたん</sup>途端です。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！ お母さん！ 白がまた帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょうか。お嬢さんは両手を延ばしながら、しっかり白の<sup>くび</sup>頸を押えました。同時に白はお嬢さんの目へ、じっと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳にありありと犬小屋が映っています。高い<sup>しゅろ</sup>棕櫚の木のかげになったクリーム色の犬小屋が、——そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には<sup>こめつぶ</sup>米粒ほどの小ささに、白い犬が一匹坐っているのです。清らかに、ほっそりと。——白はただ<sup>こうこつ</sup>恍惚とこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を<sup>だ</sup>抱きしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——御覧なさい、坊ちゃんの威<sup>いば</sup>張っているのを！

「へっ、姉さんだって泣いている癖に！」

(大正十二年七月)



白

平成二十三年六月二十一日 初版

著者 芥川 龍之介

発行所 藍岩堂